

【用語集】

	用語	解説
あ行	硫黄酸化物 (SO _x) (36 ページ)	硫黄の酸化物の総称で、一酸化硫黄、三酸化二硫黄、二酸化硫黄、三酸化硫黄、七酸化二硫黄、四酸化硫黄等があり、通称ソックス (SO _x) ともいう。石油や石炭等の化石燃料など硫黄分を含んだものを燃焼するときには排出される。
	一般廃棄物 (1 ページ)	廃棄物処理法における廃棄物の区分。産業廃棄物以外の廃棄物をいう。同じく廃棄物処理法において、市町村は区域内の一般廃棄物の処理責任を規定されている。
	エアカーテン (54 ページ)	建物の出入り口の上方から空気を壁状に吹き下ろし、内外の空気の交流を遮断する装置。
	塩化水素 (HCl) (36 ページ)	塩素と水素の化合物で分子式は HCl で表される。常温においては、刺激臭を有する無色の気体として存在し、水に溶解することで塩酸となる。
か行	回帰式 (17 ページ)	過去の実績データを基にして最小二乗法(プロットされた実績点から求める傾向線までの距離の二乗の和が最小となるように傾向線を定める方法)により求められる傾向線。
	過熱器 (80 ページ)	ボイラ本体で発生した飽和蒸気を、更に過熱して過熱蒸気をつくる装置。
	減温塔 (48 ページ)	ボイラ又はエコノマイザ出口より流入する燃焼ガスを、水の蒸発潜熱を利用して冷却減温する設備。
	ごみ質 (13 ページ)	ごみの物理的あるいは化学的性質の総称であり、通常、三成分(水分、可燃分、灰分)、単位体積重量(見掛比重)、物理組成(種類別組成)、化学組成(元素組成)及び低位発熱量等でその性質を表示する。
さ行	サーマルリサイクル (1 ページ)	廃棄物を燃焼させるときに生じるエネルギー(熱・蒸気等)を回収し、発電や温水等の熱源、冷暖房として利用すること。
	産業廃棄物 (13 ページ)	事業活動に伴って生じた廃棄物のうち、廃棄物の処理及び清掃に関する法律及び同施行令で指定されている 19 種類の廃棄物。一部には排出業種が特定されている。その処理責任は事業者が負い、指導等は都道府県が所管している。
	三成分 (14 ページ)	湿りごみ中の水分、可燃分、灰分のこと。
	実稼働率 (8 ページ)	年間実稼働日数を 365 日で除して算定したもの。
	ストロブワ (80 ページ)	ボイラ・過熱器・節炭器等のガス側伝熱面に付着する飛灰を蒸気又は圧縮空気により吹き飛ばして除去する装置。

	主灰 (30 ページ)	焼却炉の炉底から排出される焼却残留物。
	循環型社会 (2 ページ)	20 世紀の後半に、地球環境保全、廃棄物リサイクルの気運の高まりの中で、大量生産、大量消費、大量廃棄型の社会経済のあり方に代わる資源、エネルギーの循環的な利用がなされる社会のことであり、2000 年制定の「循環型社会形成推進基本法」においては、「天然資源の消費を抑制し、環境への負荷ができる限り低減される社会」と定義されている。
	純水装置 (80 ページ)	水から物理的または化学的な処理によって不純物を除去した、純度の高い水を製造する装置。
	蒸気タービン (79 ページ)	蒸気のもつエネルギーを、タービン(羽根車)と軸を介して回転運動へと変換する外燃機関。
	スラグ (24 ページ)	熔融固化物の中で、主に金属以外の無機物が熔融し、冷却固化したもので、土木資材等としての有効利用が可能である。
	相関係数 (17 ページ)	実績データと傾向線との関係の度合いを表すものであり、相関係数の絶対値は 1 以下で、1 に近ければ相関が高いといえる。
た行	ダイオキシン類 (36 ページ)	有機塩素化合物であるポリ塩化ジベンゾパラジオキシン、ポリ塩化ジベンゾフラン及びコプラナー P C B の総称であり、他の多くの化学物質と異なり、製造を目的として生成されたものではなく、物の燃焼や化学物質の合成等の過程で副産物として生成され、環境中では極めて安定しており、生物に対する毒性の強いものが多い。
	脱気器 (80 ページ)	給水中の酸素・炭酸ガス等の非凝縮性ガスを除去し、ボイラ等の腐食防止としてボイラ給水の加熱のために設置する装置。
	窒素酸化物 (NOx) (36 ページ)	窒素の酸化物の総称であり、一酸化窒素、二酸化窒素、一酸化二窒素、三酸化二窒素、五酸化二窒素等が含まれ、通称ノックス (NOx) ともいう。大気汚染物質としての窒素酸化物は一酸化窒素、二酸化窒素が主であり、工場の煙や自動車排気ガス等の窒素酸化物の大部分は一酸化窒素である。
	厨芥類 (14 ページ)	台所や調理場から出る生ごみ(野菜や魚介等のくず)のこと。
	低圧蒸気復水器 (80 ページ)	蒸気タービンで仕事をした後の水蒸気(低圧排気)を等圧冷却して凝縮させ、低圧の飽和液に戻す装置。
	低位発熱量 (13 ページ)	ごみ中の水分及び可燃分中の水素分が水蒸気となる際の蒸発潜熱を高位発熱量(熱量計で測定される総発熱量)から差し引いた実質的な発熱量。
	T E Q (37 ページ)	Toxicity Equivalency Quantity または Toxic Equivalents の略で、毒性の強さを加味したダイオキシン量の単位。
	点高法 (61 ページ)	広い面積の土工量の算出方法である。土工量の求積地域を一定の網(メッシュ)でおおい、網の交点の地盤高をはかり、1 網目の面積と網の交点の地盤高の差から単位面積の土工量を求め、必要な地域の土工量を計算する。

な行	<p>ng (pg) (37 ページ)</p> <p>m³N (36 ページ)</p> <p>燃焼空気比 (78 ページ)</p>	<p>10億分の1グラムを表す重さの単位。(pgは1兆分の1グラム)</p> <p>0、1気圧下での気体体積を表すもの。</p> <p>理論空気量に対する実際空気量の割合のことであり、燃焼に必要な空気量に対し、どれだけ余分に空気を使っているかを示す。</p>
は行	<p>ばいじん (36 ページ)</p> <p>廃熱ボイラ (28 ページ)</p> <p>白煙防止 (78 ページ)</p> <p>発電効率 (49 ページ)</p> <p>ppm (36 ページ)</p> <p>飛灰 (30 ページ)</p> <p>復水タンク (80 ページ)</p>	<p>「ばい煙」のひとつで、焼却に伴い発生したすすや燃えかすといった固体粒子状物質のことをいう。</p> <p>廃熱で加熱されるボイラ。</p> <p>ごみの焼却によって発生した熱エネルギーを利用して、排ガス中の水蒸気である白煙の発生を防止すること。</p> <p>ごみの持つ熱量をどれだけ発電できたかを示す指標であり、次式にて算定される。 $\text{発電効率} = \text{発電量(kWh)} \times 3,600\text{kJ/kWh} \div \text{ごみ入熱量(kJ/h)}$</p> <p>parts per millionの略で、ある量が全体の100万分のいくつを占めるかを表すときに用いる。</p> <p>焼却時に排ガス中へ移行した後、集じん器及びボイラ、ガス冷却室、再燃焼室等で捕集されたばいじんの総称。</p> <p>高温水を貯留するための円筒形又は角型のタンク。</p>
ま行	<p>民間活用 (24 ページ)</p>	<p>公共施設の整備・運営に民間事業者のノウハウや資金を積極的に活用する手法。</p>
や行	<p>誘引送風機 (48 ページ)</p>	<p>燃焼排ガスを吸引し煙突へ排出するために用いる送風機。</p>
ら行	<p>ライフサイクルコスト (2 ページ)</p> <p>連続運転式 (41 ページ)</p> <p>ろ過式集じん器 (47 ページ)</p>	<p>製品や構造物などの費用を、調達・製造～使用～廃棄の段階をトータルして考えたもの。</p> <p>24時間連続稼働する焼却炉。</p> <p>通称バグフィルタと呼ばれる排ガス処理装置の1つで、ろ材として織布又は不織布を用いたばいじんの捕集機能を有するが、ごみ焼却施設では、除じんのみを目的としておらず、有害ガス除去を含めた排ガス処理システムの一部として使用されることが多い。</p>